

# KEYワード

第73回

## 前田藤四郎展から思うこと 私鉄沿線モダニズム再考

近代の大阪では、大正末の第二次市域拡張による“大大阪”成立とも関係して、文化や芸術にモダニズムが開花した。綿業会館、ガスビルなど、建築にその華やかさを実感できるし、当時の美術作品に、大阪の画家たちの熱気が確認できる。

この10月に栃木県の鹿沼市立川上澄生美術館で、特別企画展「前田藤四郎と川上澄生—モダニズム版画の実験室—」が開催される。遠方だが、大阪新美術館建設準備室が特別協力し、大阪モダニズムを代表する版画家・前田藤四郎(1904～1990)の芸術が全国発信されるのは喜ばしい。そのカタログを書いて改めて感じたことがある。

モダニズム文化では「阪神間モダニズム」という言葉が知られる。平成9(1997)年に兵庫県下の美術館が連携して「阪神間モダニズム」展も開催された。しかし、戦前に前田が活動したのは船場のど真ん中、淡路町や平野町である。「阪神間モダニズム」は、阪神間の住宅地が点在した都市近郊タイプのモダニズムであり、前田を語るには、大都会の中心でダイナミックに展開した都市型の「大阪モダニズム」が必要である。

そしてもう一つ、「阪神間モダニズム」が阪急・阪神沿線の文化であるのに対し、他の私鉄沿線の文化の再検証もあまり進んでいないのではないか。

たとえば戦前の京阪沿線では、大阪・京都の中間に位置する枚方に、京阪奈学研都市に相当する大学都市建設の構想があったらしく、昭和3(1928)年、大阪女子高等医学専門学校(現、関西医科大学)が開かれ、翌昭和4年、矢野橋村、齋藤與里らの大阪美術学校が大阪市内から枚方御殿山に移転して本格的な校舎を建設している。

昭和6(1931)年には、香里駅の東に造成された宅地でハウジングフェア「香里改善住宅展覧会」が開催された。表紙にある前田の《香里風景》は、このモデルハウスを会場にした「室内美術展」に出品されたようである。田園風景を描いた優美な作品で、都心で働くサラリーマンの需要に応え、郊外でのアートのある新しい生活を提案する。まさに都市近郊の私鉄沿線モダニズムだろう。



前田藤四郎《香里風景》(大阪府20世紀美術コレクション)

南海電鉄や阪堺線にもモダニズム文化がある。帝塚山や住吉は“大大阪”成立で大阪市に吸収さ



阪堺線、聖天坂の齋藤清二郎宅での岸田劉生(左手前)【劉生絵日記】より。大正13(1924)年6月19日

れるが、文学者や画家が集まり、文化圏を形成していた。院展の中村貞以(1900～1982)は帝塚山に画室を構え、関東大震災後に京都に移住した岸田劉生(1891～1929)も大阪での所用の折りは、聖天坂(西成区)にあった画家仲間の齋藤清二郎宅に宿泊し、二階からの眺めを小品に描いている。最近「帝塚山モダニズム」が唱えられ、藤澤桓夫、伊東静雄、庄野英二、庄野潤三など文学者研究を中心とした「帝塚山派文学学会」も結成された。

大軌(大阪電気軌道)の名称で親しまれた近鉄沿線では、大正12(1923)年、大阪の日本画壇の中心、北野恒富(1880～1947)が東大阪小阪に五十六畳敷のアトリエのある居宅を設けている。小出梢重(1887～1931)が、洋画家としてハイカラな神戸に近い芦屋に転居したのと同じく、日本画家として日本の古美術に関心が高い恒富が、奈良に近い近鉄沿線に転居したのは当然かもしれない。

大正5(1916)年には小阪に映画の撮影所が開設され、昭和3(1928)年に「東洋のハリウッド」とよばれた帝国キネマの長瀬撮影所が設立された。撮影所の跡地は現在の樟蔭学園樟徳館に当たり、近くの長瀬川には「帝キネ橋」が架かっている。

「阪神間モダニズム」は西宮や芦屋、伊丹など各市に美術館がある兵庫県下で顕彰され、発信されてきたが、前田藤四郎展のカタログを書き進めながら、「大阪モダニズム」やそのほかの私鉄沿線のモダニズム文化について、せめて地元大阪で愛情をもって発信してもらいたいと呟いた今年の夏であった。



近鉄沿線のモダニズム 帝国キネマ 長瀬撮影所

### 筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ—増殖するマンモス／モダン都市の幻像—」(創元社)など。